

月影



第 49 号

平成二十六年四月三十日発行

浄土宗西山禅林寺派

常林院

この花散らすも

雨と風

この花咲かすも

雨と風



散らせようと吹く風はなく
咲かせようと降る雨もなし

風は無心に吹き
雨は無心に降る

花はそれを
ただ受け入れるだけ

咲いて喜び
散って憂うは

人の心のみ

法然上人 一百四十五箇条問答

一遍の念仏でも往生する

阿弥陀さまとい

う仏さまは、

「大きな願い」

を叶えるため

に仏さまとな

られました。

その大きな願

いとは、「私た

ち衆生を極楽

へと往生させ

る」ことです。

阿弥陀さ

まの前で手を

合わせる時、

私たちが阿弥

陀さまを思う

以上に、私た

ちが阿弥陀さ

まから願われ

ているのです。

阿弥陀さ
まは「私
の名を呼

仏」とお念仏を称え
るのです。
南無阿弥陀仏の

「私のお念仏は「私の名
を呼びなさい」とい
う阿弥陀さまへの

ぶ者を必ず往生さ
せます」と誓われま
した。だから私たち
は阿弥陀さまに向
かって「南無阿弥陀

南無は「おまかせし
ます」ということ。
つまりお念仏とは
「すべて阿弥陀さ
まにおまかせいた

返事であり、私たち
の阿弥陀さまへの
思いをあらわすも
のです。

問

念仏の百万遍、百度申してかならず往
生すと申す候に、いのちみじかくては
いかがし候べき。

答

これもひが事に候。百度申てもし候、
十念申てもし候、又一念にてもし候。

問

百万遍の念仏を、百万遍となえると必ず
往生すると申されていますが、命が短く、
それだけとなえられない者は、どうした
らよいでしょうか。

答

これも間違った考えです。百遍となえても
往生しますし、十念でも往生します。また、
一遍の念仏でも往生するのです。

阿弥陀さまの

願いと、私たちの

思いが、一つにな

るのがお念仏な

のです。

こんな至らな

い私が、たとえ一

遍のお念仏でも

救われる。このあ

りがたさを心に

感じながら、よろ

こびのお念仏を

称えましよう。

春の彼岸会厳修する

去る三月二十一日、当寺で春の彼岸会を勤めました。彼岸中は不安定な天気が続き、彼岸会当日も朝から雨が降ったり止んだりの空模様でした。そんな足もとが悪い中にもかかわらず、お参り下さいました檀信徒の皆様ありがとうございました。

彼岸会法要

十三時、彼岸会法要の勤行。お彼岸の回向をお申込み頂いた方々の水塔婆回向をし、各家ご先祖さまの供養を致しました。お参りされた皆様にはお焼香をして頂き、一緒に供養を致しました。

法話

十四時、法話。今回の法話は、組寺である下津林の長福寺御住職、岡本光正師にお越し頂きました。

話のテーマは六波羅蜜（彼岸に渡る為の六つの実践徳目）の一つ「忍辱（にんにく）」についてお話しされました。以下、法話の内容の一部分です。

■桜も耐えている
「桜が開花する為には寒い期間が必要なのです。花は寒さによって目を覚まし、寒さに耐えながら、ゆっくり

耐え忍び受け入れる

ゆっくり花を咲かせる準備をしているのです。この耐えることを仏教では忍辱（にんにく）と言います。」

■忍辱の定義

「忍辱の忍は（しのぶ）辱は（はずかしめ）という意味です。つまり、『はずかしめを忍ぶ』ということなのです。

『怒りを耐え忍び、自分を見つめて、相手を受け入れること』。

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の『欲は無く、決して怒らず、いつも静かに笑っている』のように、苦しみに耐えるだけではなく、受け入れることを忍辱と

いうのです。」

■繋がっている

「私たちは、全てのものとつながっています。どんな相手も自然も、みんな「南無阿彌陀仏」と受け止める。辛いこと、哀しいことがあっても、ぐっと我慢して、相手を受け入れることが大切です。」
※次回、秋の彼岸会は九月二十三日（秋分の日）です。



彩寺記

花まつり

四月八日は花まつりです。当山でも観音講さまと共に、毎年、花まつりの法要をお勤め致します。

灌仏会（かんぶつえ）とも呼ばれるこの法要は、四月八日にお生まれになったお釈迦さまのご誕生を祝う法要です。

花御堂をおかぎりし、その中に、甘茶で満たした灌仏桶を置き、その中央に誕生仏（お釈迦さまがお生まれになられた時のお姿の仏像）をおまつりします。誕生仏のまわりには花をお供えし、小さな柄杓で誕生仏に甘茶をかけます。



甘茶をかけるのは、お釈迦さまが花畑で誕生された時、産湯をつかわせる為に龍が空から甘い香りの雨をふりそそいだ言い伝えに由来します。

甘茶とは、ガクアジサイの変種であるアマチャの若い葉を蒸してもみ、乾燥させたものです。甘茶には抗アレルギー作用、歯周病に効果があると言われています。また、虫除けの効果もあるそうです。

雑記抄く美しく咲くく

花が一齐に咲き誇る春は、一年の中でも最も生命の息吹を感じる季節です。

▼ある禅の問答です。「この多くの花たちは誰の為に咲くのか？」という問いに対して、禅者はこう答えます。「花は花だから咲くのだ。誰の為でもない。」と。▼毎年綺麗な花を見て心癒されると、つい私たちが人間の為に咲いているのではないかと錯覚してしまいます。しかし、私たち人間の為に咲いているのではないと禅者は言います。▼考えてみると、花は人がいる所だけに咲くわけではありません。人が足を踏み入れない山奥でも花は咲きます。誰にも知られることもなくひっそり

と咲き、誰にも知られることもなく静かに散っていく花もあります。「美しい」と感じるのには、見る人の心に起こるもので、花が感動させようとしているのではありません。▼詩人の高田敏子さんの詩にこんな詩があります。「花は咲く／だれが見ていなくても／花のいのちを／美しく／咲くために／人は人であることのために生きているのかしら」▼花は自らのいのちを美しく咲くために咲く。たとえ短いのちでも、生きていく喜びに満ちあふれている。その一途な姿が、見る人の心に感動を与えるのかもしれない。そして、人間もこうあるべきだと教えられているような気がします。